

グアテマラとのつながり 齊藤忍

私がグアテマラとつながりをもつようになったのは今から十年ほど前である。当時私はスペイン語に触れる機会を探していた。私の大学での専攻はスペイン語で、大学時代スペインに一年間留学していた。しかし大学を卒業して就職した会社ではスペイン語を使う仕事はなかった。せっかくいくらか話せるようになったスペイン語を忘れてしまうような気がして、あせっていた。その一方、会社で働き、余暇を楽しむ生活に単調さを感じていた。なにか他に自分にできることはないかと探していた。ちょうどその頃「NGO」という単語を耳にした。「NGO」は様々な国のある特定の人々を様々な分野で支援していた。スペイン語は、と探すとグアテマラがあった。日本ラテンアメリカ協力ネットワークという団体がグアテマラの先住民族の活動を支援していた。それが私がグアテマラに興味をもった始まりである。

日本ラテンアメリカ協力ネットワークの会員になってグアテマラの内戦や先住民族の暮らしや社会経済状況について初めて知った。私は大学時代ラテンアメリカに関する授業も出ていたのだが、グアテマラを含め中米に関する授業はメキシコを除いてなかった。今にして思えば、それはそうだと思う。その当時グアテマラは内戦中だった。スペイン、メキシコ、ペルー、ブラジル、アルゼンチンについての授業があったことは記憶している。しかし私はそれらの国について実感をもって授業を聞くことはしていなかったと思う。「スペイン人によって征服され、その後スペインより独立したものの、その後も内戦や政争が絶えない自分とは無関係の遠い世界」というイメージをもっていた。そこに生きる人々について想像したことはなかった。だから内戦について初めて知ったとき、スペイン語を学ぶ場にいた自分は一体何をやっていたのかと衝撃をうけた。

それから日本ラテンアメリカ協力ネットワークのスタディ・ツアーでグアテマラを訪問した。コナビグアの女性たちと会い、じかに言葉を交わし、彼女たちの活動を知った。そこで彼女たちは自分よりも小柄で、自分よりも若いのに子供が何人もいて、自分よりも老けて見えることを知った。自分はまだ結婚していないのに（まあ日本でも結婚していてもおかしくない年齢だったけど）相手はもう結婚して、離別していた。衝撃をうけて、本当に違う世界に行ったことを実感して帰国した。

帰国してから、大学院に入学した。彼女たちが組織化して活動を始める原因となった政治状況や人権状況を含めた理由を自分なりに知りたいと考えたからである。しかしながらこのときの自分の気持ちは今でもうまく説明できない。なぜ自分の大事な資金を使ってまで彼女たちのことを知りたくなったのだろうか。彼女たちを助けるために、経済的援助をする以外に何かできる人間になりたいという思いはあったけれど、大学院にはいるという行動をとったのは以前の自分からは考えられないことだった。

時間は流れて、今年の六月十六日に母校でコナビグアのアナ・ペレスさんの講演会を開催した。日本にアナ・ペレスさんがやって来ると聞き、以前グアテマラでアナ・ペレスさんに会ったときに「日本のあなたの友人に私たちのことを伝えてほしい」と言われたことを思い出したからである。実は以前も別のコナビグアの女性に同じことを言われた。それはもっともだと思う。しかしその一方で「話をした相手が興味をもってくれなかったら

グアテマラへようこそ

どうしよう、「話すだけ無駄かも」と迷った。そして結局私はだれにも話すことはなかった。しかしアナ・ペレスさんがやって来ると聞いて、私にスイッチがはいった。それは以前にグアテマラで直接本人からコナビグアを設立した経緯を聞いていたからである。内戦から逃げるだけだった、軍に拉致された、脱出して国外避難民になった、スペイン語もあまりできないのにコナビグアを設立したという話だった。到底私にはなさそうな人生だった。スイッチが入った後は大学の教授にかけあって場所と機会を提供してもらった。事前準備の間はほぼ毎日パソコンに向かっていた（終わってからはしばらくはパソコンを開けなかった）。講演会はまずまずの盛況だった。参加者のコメントを読むと、言葉は直接通じなくてもアナさんが必死で生きてきたことが伝わっていると思う。ようやく一つ彼女たちにたいして経済的援助以外のことが出来た。それをとてもうれしく思っている。その一方で思いに応えるということは遅遅としてしかできないことなのだ実感している。

(財)日本国際協力センター 研究員 齋藤 忍